

中尾山古墳の発掘調査と今後の課題

米田文孝

Archaeological excavation of Nakaoyama Tumulus and future issues

YONEDA Fumitaka

The Nakaoyama tumulus is a terminal burial mound located in Asuka Village, Takaichi County, Nara Prefecture, and its unique burial chamber, Yokoguchi-shiki sekkaku (stone sarcophagus with side entrance), has been the focus of attention in academic circles since early times. In the Edo period (1603-1868), it was considered a strong candidate, along with the Takamatsuzuka tumulus, as the mausoleum of the Emperor Monmu due to its location and characteristics. In fiscal 2020, the Asuka Village Board of Education and the Archaeology Laboratory of Kansai University jointly conducted a range confirmation survey to elucidate the structure of the Nakaoyama tumulus, which is a component of the “Asuka-Fujiwara: Archaeological sites of Japan’s Ancient Capitals and Related Properties” aiming to be registered as a World Heritage Site. As a result, it was found that the Nakaoyama Tumulus had an octagonal burial mound with a three-tiered structure, and stones were piled up on the first and second tiers, while the burial mound was formed by rammed earth on the third tier. In addition, it was confirmed that there were three laps of stone paving around the mound.

The purpose of this paper is to trace the process of research on the Nakaoyama burial mound up to the present day, to give an overview of the results, and to present issues for future research on terminal-period burial mounds.

キーワード：飛鳥時代、終末期古墳、中尾山古墳、高松塚古墳、文武天皇

はじめに

中尾山古墳は奈良県高市郡明日香村大字平田小字中尾山 670-2 番地他に所在する終末期古墳であり、盗掘により開口した特異な埋葬施設である横口式石槨が早くから注目されてきた。2020年9月2日、1974年12月から1975年1月に行われた環境整備事業にともなう事前調査から、約46年の時を経て中尾山古墳の範囲確認調査が開始された。現在、奈良県・橿原市・桜井市・明日香村は2024年度の世界遺産登録を目指して精力的に活動しているが、今回の発掘調査はその構成資産の一つである中尾山古墳の墳丘規模や構造などの解明を目的として実施

された。発掘調査は明日香村教育委員会と関西大学文学部考古学研究室が共同して、2021年3月まで約6カ月間に及んだが、2021年度末の正式報告書の刊行を目標として作業中である。本稿では中尾山古墳の築造後、本墳に言及した史料や地誌、絵図などから、今回の発掘調査に継起するその形態的な変遷過程について、時系列にしたがって概観することを目的とする。

1. 江戸時代の山陵調査と中尾山古墳

飛鳥時代から奈良時代へと時代が遷るころ、中尾山古墳が築造された。その後、858年(天安2)に清和天皇が十陵四墓の制を定め、陵墓に対する祭祀を限定・簡素化する政策を断行したことなどもあり、次第に陵墓が忘れられるようになった。927年(延長5)、藤原忠平らにより撰進された『延喜式』(諸陵寮)には、朝廷の奉幣をうける歴代の陵墓一覧とその所在地が記録されたが、律令制度の弛廃から山陵の荒廃は加速し、その所在が少なからず不分明になった。さらに、中世以降は盗掘や城砦への改変などにより、築造当初の原形を大きく損なった山陵が数を増した。

江戸時代を迎えると文運の興隆にともない、再び山陵が注目されるようになった。例えば、1681年(延宝9)の開版である林宗甫の地誌『大和名所記(和州旧跡幽考)』では、『続日本紀』にある文武天皇の崩御に関する記事を引用する¹⁾。このような時代の趨勢から幕府は1697年(元禄10)に山陵の検分・修補事業を開始する。山陵の検分・修補が京都所司代(松平信庸)の命により実施され、大和国と摂津・河内・和泉国に所在する山陵の絵図と由緒書が作られたが、大和国山陵図は南都奉行が行った²⁾。未管理の諸陵に垣を設け、配下の奉行所や所在地の地行藩にその管理を担当させた。その後、山陵の検分・修補は享保・文化・安政・文久・明治と、幕末・明治初頭に至るまで断続的に実施された。

現在、元禄10年に始まる山陵調査の成果である山陵図と断定できる原本・複本類の所在は不明である。しかし、この原本・複本類を転写した写本の流れをくむ山陵図が伝わり、その中に中尾山古墳と推定できる絵図を含むものがある。例えば、細井次郎太夫著の『諸陵周垣成就記』(早稲田大学図書館蔵)には、図中に墨書された小字名から中尾山古墳の可能性が高い絵図が「未考御陵」の一つとして収録されている³⁾(図1)。この絵図の西側は「高四間」の墳丘が大きく抉られているように表現されており、「此所往古堀崩候体二見エ申候」と注記がある。この描写は中尾山古墳と推定できる同様の「未考御陵」を含む『廟陵図』や『大和國陵廟之図』(松坂春央旧蔵本)などに共通しており、これらの原本に描写された17世紀初頭までには、盗掘による墳丘の損壊は現在と同様の形状を呈していたのであろう。

また、早稲田大学図書館蔵本の「未考御陵」図には、その西側から描写された墳頂中央部

1) 奈良県史料刊行会編 1977『大和名所記』奈良県史料第1巻 豊住書店
 2) 戸原純一 1964「幕末の修陵について」『書陵部紀要』第16号 宮内庁書陵部
 3) 細井次郎太夫『諸陵周垣成就記』(元禄12年序) 早稲田大学図書館蔵

に1個の石材らしきものが描かれており、中尾山古墳に特徴的な巨大な石槨天井石の上面が盗掘により露呈している状態を表現していると推定できる。さらに、「未考御陵 同高市郡平田村植木左エ門佐領知」の左側にはのちの貼紙があり、下記の書付がある。

此陵 欽明天皇カ又ハ字金塚イフ墳カ 平田村ニアル古墳欽明天皇ノ陵ナリトイヘトソレ
ハ字ヲ梅山トイヘリコレハ中尾山トアリ 欽明天皇ノ御陵ハ礫ヲ以テツキタルナレバヨリ
シル、ハヅナルニ不審也 山陵志ニハ礫ヲ以テツキタル陵トアリテヨクシラレタルサマナ
リ 此書ニナキハイカ、ナルコトナリ

この貼紙は1808年（文化5）に刊行された『山陵志』に言及することから19世紀初頭以降のものと推定できるが、その筆者は、本書の中に欽明天皇陵とする絵図がないことから、未考御陵絵図中の本図にそれを比定する可能性を求めて勘案する。しかし、所在地の字名が異なることや、『日本書紀』にある推古天皇28年冬10月の「砂礫を以て檜隈陵の上に葺く」にある、欽明天皇陵が礫で築かれているという記事との齟齬から疑わしく、本書が欽明天皇陵の絵図を載せないことは何故かと訝しがっている。すなわち、中尾山古墳と措定できるこの絵図には礫石の描写が看取できず、この時点では外周石敷から墳丘2段目までに積み置かれた大量の礫石は露呈していなかったのであろう。

同様に、わずかに遺存する題箋から『御陵墓図』（末廣社庫旧蔵）とした卷子本にも、「未考御陵」として同様の絵図がある（図2）。この卷子本に刊記はないが、巻末の山城国にある歴代天皇名と陵墓所在地一覧の最後に「後桃園院 安永八年一二月廿日崩」と異なる墨蹟で追記されるが墓所の記録がないことから、同年（1779年）以前の中尾山古墳を表現している絵図と措定したい。この卷子本には、「文武天皇御陵」として、高松塚古墳の絵図も描かれている（図3）。

また、幕命を受けた奈良奉行の指示により、与力玉井与左衛門定時らが大和国内の山稜を实地検分し周垣を巡らせたが、玉井はその顛末書である『元禄十丁丑年山陵記録』を残した。これによると、12月9日に奈良を出発した玉井は、同月12日に野口村で天武・持統合葬陵を改めた後、向原寺から中尾塚・高松塚を改めている。その結果、中尾塚を欽明天皇陵、高松塚を文武天皇陵と比定した⁴⁾。

次に史料をみると、1734年（享保19）に完成した最初の幕撰地誌とみなされる並河誠所らの『大和志』（五畿内志）には、「檜ノ前安古ノ岡上ノ陵」について「文武天皇。平田村ノ西ニ在 俗ニ中尾ノ石墓呼」、同じく「檜隈ノ墓」について「吉備姫ノ王。文武帝ノ陵ノ南六十歩許ニ在 俗ニ高松塚ト呼」としているが、中尾山古墳と吉備姫墓とした場合、南60歩（約108m）とする方角と距離には実際との乖離がある⁵⁾。

4) 秋山日出雄・廣吉壽彦 1994『元禄年間 山陵記録』（財）由良大和古代文化研究協会

5) 並河誠所校訂 1987『大和志』 臨川書店

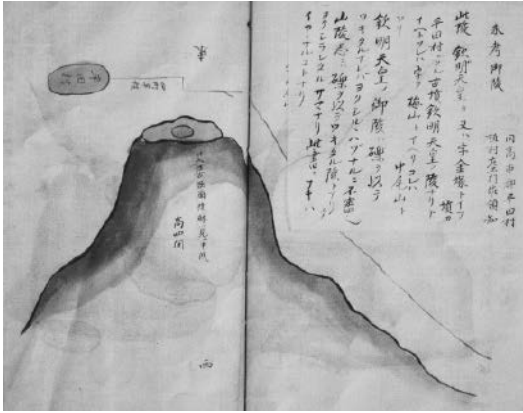


図1 中尾山古墳の絵図1

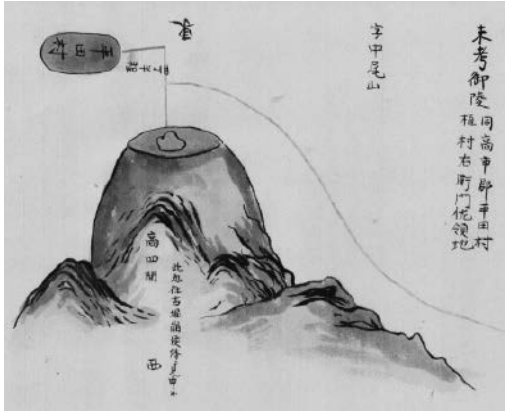


図2 中尾山古墳の絵図2



図3 高松塚古墳の絵図1



図4 『聖蹟図志』にみえる檜隈安古岡上陵 (○印)

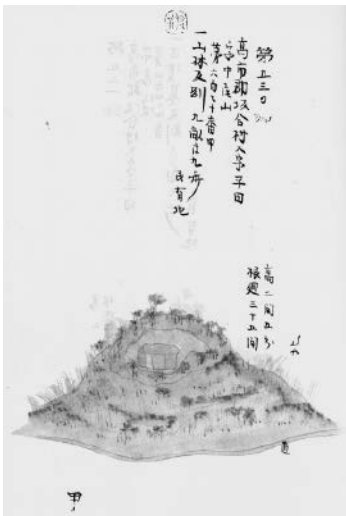


図5 中尾山古墳の絵図3



図6 高松塚古墳の絵図2

1791年（寛政3）には京都の文人秋里籬島が絵図入りの地誌『大和名所図会』6巻7冊を刊行する。この中で文武天皇陵について、「平田村の西にあり。俗に中尾の石墓といふ。陵図考に曰く。字は高松山、高さ二間二尺、廻二十間。」と記している⁶⁾。また、1796年（寛政8）と同12年の2度にわたり畿内を調査し、歴代天皇の山陵を考証した蒲生君平は1808年（文化5）に『山陵志』を刊行したが、この中で「文武陵安古岡在」として「陵上孤松茂翳以テ今高松山ト呼 一美賛佐伊名。」と記している⁷⁾。

幕末期に至り、1854年（安政元）の自序がある津久井清影の『聖蹟図志』が『陵墓一隅抄』の附図として作成された⁸⁾。本書は山陵の所在を考証し、陵墓の地理的關係を具体的に示した最初の図誌である。従来の山陵絵図が類型的であることに対し、この『聖蹟図志』は銅版刷の精緻な写實的絵図という特徴がある。その下巻（京郊并山城部）の「大和国高市郡檜隈及身狭越智並畝傍山四辺諸陵図」中には、頂上に松と枯松を各1本描いた円丘の絵図に「檜隈安古上文武帝陵坎」と「字 高松冢」と表記している（図4）。

このように、江戸時代では『延喜式』にある文武天皇の「檜前安古岡上陵」の考証過程において、その立地や特徴から中尾山古墳と高松塚古墳の両者が俎上に挙げられていたことがわかる。

2. 明治時代から昭和前期の調査研究と中尾山古墳

1889年（明治22）、元禄年間から断続的に続いた山陵の治定は、伊藤博文の条約改正を背景にした強い意見を受けて、未治定の13陵の確定作業が急速に進められた。その結果、同年6月25日に崇峻天皇陵の改定と安徳天皇陵が定められ、これを以って天皇陵の治定作業は基本的に終わり、現在に至っている⁹⁾。

天皇陵の治定作業終了に先立つ1882年（明治15）、中尾山古墳の旧状を大きく改変させる出来事が起こった。同年12月25日、平田村の村民が天照皇大神拝殿を建築する目的から、中尾山古墳の石材を掘取って村内に運搬していたところ、「奇石之出ツルヲ見テ一同驚愕シ速ニ同時ニ鑿ツ事ヲ相止」たという。本件の顛末については、平田村戸長の松岡伊八から高市郡長の江馬朝道宛に「手続書」（明治16年3月5日付）が作成され、同じく松岡から江馬に「上申書」（明治16年4月付）が作成された。また、江馬から大阪府知事建野郷三に「御第百三拾七号」（明治16年3月6日付）として、上申書に当該地の略図や本墳の概略図などの関係書類を添えて報告するとともに、指示を請う書類を提出した。建野からは宮内卿徳大寺實則に「古墳発見之義上申」（明治16年4月16日付）が送達されたが、これを受けた宮内卿から「書面古

6) 秋里籬島編 1971『大和名所図会』歴史図書社

7) 蒲生君平 1911「山陵志」『蒲生君平全集』東京出版社

8) 津久井清影 1854『聖蹟図志』下 京郊并山城部

9) 尾谷雅比古 2008「制度としての近代古墳保存行政の成立」『桃山学院大学総合研究所紀要』33-3 桃山学院大学総合研究所

墳ノ儀ハ追テ當省官員出張見分ノ上何分可及指令候 条該石棺ハ其俣差置候達方可取計事」(明治16年5月12日付)という通達があった¹⁰⁾。後述する1974年度と2020年度の発掘調査で確認された大型石材の採取跡や礫石の残存状況は、このときの採石工事の反映であろう。

なお、上記の略図に記された石棺(中尾山古墳)から治定された「文武天皇御陵」、「天武天皇・持統天皇御陵」、「欽明天皇御陵」の方位と距離について検証すると、方角はほぼ一致している。一方、距離についてみると文武天皇御陵までは274間(約493m)に対して実測距離は約424mと長く、天武天皇・持統天皇御陵までは245間(約441m)に対して約513m、欽明天皇御陵までは246間(約443m)に対して約670mと短い。また、「文武天皇御陵」とのほぼ中間に、高松塚古墳と推定できる「塚」が描かれている。

1893年(明治26)には、奈良県属の野淵龍潜が県下全に及ぶ古墳を調査した『大和国古墳墓取調書』が完成した¹¹⁾。この中に中尾山古墳は第530号として、墳丘東方の小道側から描かれた絵図がある(図5)。ここで注目すべき点は、墳丘の損壊状況と石槨の露出状況とである。墳丘は三段目が大きく西方から東方側に切り崩されており、本墳に特徴的な石槨が描写されている。墳丘では、三段に築成された墳丘形態が初めて描写された絵図である。石槨周辺では天井石が露呈し、その北側や南側閉塞石まで大きく掘込まれている状況や、盗掘により東南隅角石が欠落し、盗掘孔が開いている状況が描かれるが、底石は看取できない。本図は、1882年の採石事業による墳丘の改変状況を反映している可能性が高い。また、高松塚古墳は第531号として、東北方から丘陵上に樹木が繁茂する円丘として描写されている(図6)。

1894年(明治27)には、奈良県大神神社宮司の斉藤美澄が当時の県知事であった小牧昌業に依頼され、1890年に編纂に着手した『大和志料』が完成した。この大和国の地誌では檜隈安古岡上陵について、「文武帝ノ陵ナリ、坂合村大字栗原ニアリ皇墓ト字ス」と、1881年(明治14)に治定された現・文武陵を記している¹²⁾。

1914年(大正3)、奈良県史蹟勝地調査会による調査報告第2回に、委員の佐藤小吉は「中尾山ノ古墳」について報告した。このとき、本墳を特徴づける石槨の実測図がはじめて作成された¹³⁾(図7)。報文で本墳の俗称について、「中尾山ノ石塚、石ニテ圍繞セラレタルヨリ地名ヲ冠ラセシカ呼ヘルナラン」としている。石槨内法についても「長サ約四尺一寸、幅約三尺七寸、高サ約二尺九寸五分」とあることから、底石まで開口していたことが判明する。また、所有者の談としてその墳丘形態は「山ノ周圍ヲ元ハ二段ニ(又所ニヨリテ三段)五六尺ノ自然石ニテ取巻カレシヲ、今其多クハ氏神境内ニ搬ヒ去ラレタリト。」とあり、これまでの記録や絵図と一致する。その他、石槨の使用石材の岩種やその加工の特徴、朱の塗布などに言及する。特に、閉塞石の側面に刳込まれた全周する溝の用途に注目し、「又全面(南)ノ石、左右、頂上

10) 奈良県立橿原考古学研究所編 2005『陵墓等関係文書目録』末永雅雄先生旧蔵資料 第1集 橿原考古学協会

11) 野淵龍潜(秋山日出雄編)1985『大和国古墳墓取調書』由良大和古代文化研究協会

12) 奈良県・斉藤美澄 1970『大和志料』下巻 歴史図書社

13) 大和文化財保存会 1977『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第2回 綜芸舎

中尾山古墳の発掘調査と今後の課題（米田）

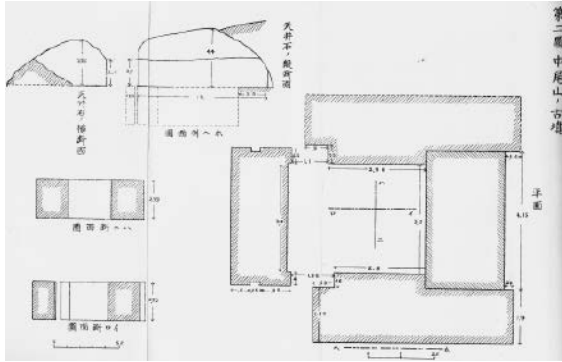


図7 中尾山古墳石槨実測図（1914年）

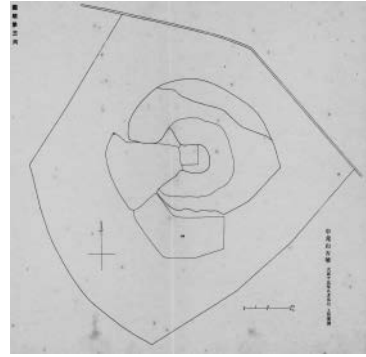


図8 中尾山古墳墳丘略測図（1927年）

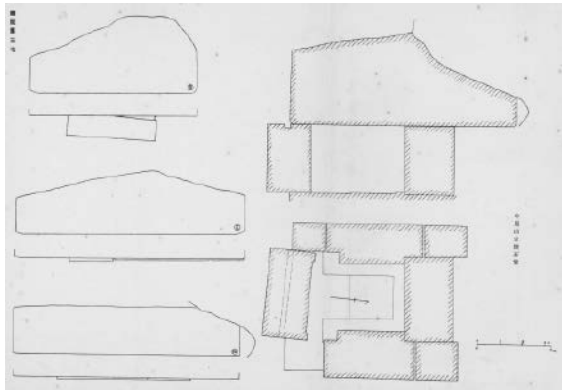


図9 中尾山古墳石槨実測図（1927年）

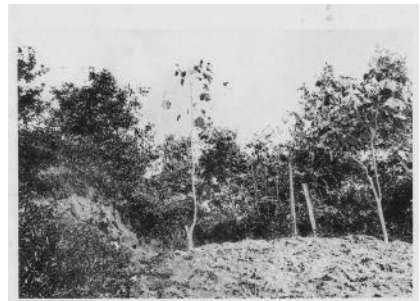


写真1 中尾山古墳の墳丘頂部と石槨天井石（1927年）

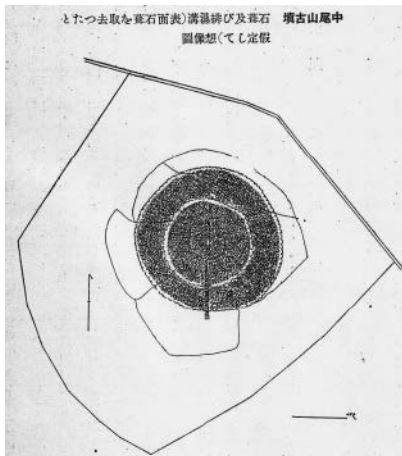


図10 中尾山古墳墳丘想定復元図（1934年）



図11 中尾山古墳石槨スケッチ（1940年・岩周集画）

共ニ深サ二寸五分許ノ小溝アリテ天井石(南)ノ直ク下ニ当レリ。サレト其用法ヲ知ニ苦シム。」と判断を控えている。翌 1915 年（大正 4）に刊行された『奈良県高市郡志料』では、「文武天皇檜前安古岡上陵」として、現文武陵をその山陵と記している。あわせて、「古老の口碑を徴するに或は高松塚を以て之に擬し或は中尾の石塚を以て当山陵となせり」と、この山陵について古来より諸説あることに言及する¹⁴⁾。

1923 年（大正 12）、高市郡により行われた陵墓調査の報告書中で中尾山古墳の現況について、「久しく荒廢に委して塚形頗る虧損し其の破壊せる所から夥しく砂礫の露れて居るのが見江る。是は往古砂礫を以て之を葺いたのであらうが現今發掘せられて石槨の一部並に内部を窺ふことが出来る」と墳丘の現状に言及し、石槨についても「其の構造は頗る他の古墳墓に於て見る所の石槨石棺とその制を異にして居る。即ち下部に臺石を据ゑその上に側壁を立て更に上部から蓋石を掩うてあるやうな極めて珍しい石槨である」と、その特徴を的確に看取している¹⁵⁾。なお、これらの調査と相前後する時期に、再び中尾山古墳から石材採取を試みようとする動きもあったと伝わる。

1927 年（昭和 2）、奈良県内の指定史蹟を内務省が一連で調査した中で、中尾山古墳に関する報告書が刊行された¹⁶⁾。その報告文によると 1925 年（大正 14）、中尾山古墳の石槨周囲が全周に及んで發掘され、石槨についての詳細な観察記録とともに、はじめて本墳の墳丘測量略図や石槨全体の実測図が作成された（図 8・9）。その墳丘は円墳で、「封土を保持する為めに周囲には直径一尺五寸以上の比較的大きな石を二段に巻き其上部は礫石を以て葺いたもの」であり、「古来石塚の称ある所以は此に存する。」と記している。あわせて、墳丘や石槨の鮮明な写真も掲載され、部分的とはいえ今日的な観点から観察・検討が可能になった点でも重要である（写真 1）。なお、文末に中尾山古墳は「本邦に於て未だ類例を發見しない貴重なものであるから史蹟保存要目第三及第九に依り昭和二年四月八日に指定せられた」ことが記されており、現存する石碑が建立された。

1934 年（昭和 9）、島本一が排水工事の施行にともない、石槨南面の發掘調査を実施した¹⁷⁾。この發掘調査にともなう図面や写真が掲載されていないため、その詳細は不明であるが、築造当初の墳丘と排水溝の復元図を掲載している（図 10）。後述する 1974 年（昭和 49）の發掘調査では、石槨南面部から西方向に向けてコンクリート製排水管が設置されており、この工事により本来の暗渠排水溝が破壊されていることが判明した。文末には総説として、本墳の精緻な石槨構造や石材加工技術などから、明らかに「古墳末期より火葬墳墓への過渡期に属する範疇に入れることが出来る」ものと位置付ける点は慧眼である。

さらに島本一は 1936 年（昭和 11）、先の發掘調査所見からその石槨南面の閉塞石に注目し、

14) 奈良県高市郡役所 1915「文武天皇檜前安古上陵」『奈良県高市郡志料』奈良県高市郡役所

15) 奈良県高市郡役所 1923「中尾山古墳」『奈良県高市郡古墳誌』奈良県高市郡役所

16) 内務省 1927『奈良縣に於ける指定史蹟 第 1 冊』史蹟調査報告 第 3 内務省

17) 島本一 1934「中尾山古墳の石葺並排湿溝施行に就て」『考古学雑誌』24 卷 6 号

議論をめぐらせている¹⁸⁾。すなわち、中尾山古墳の閉塞石は2枚の板石が嵌め込まれ、あたかも1枚の板石のような形態を呈しているとし、これを出発点にして閉塞方法についての議論を深めている。なお、この排水管工事設置にともなう発掘調査時に「加工石材」、現在の沓形石造物が石槨の南方約0.9～1.2m、深さ約0.9mの地点から出土したことが報告され、略測図も掲載される。その後、この沓形石造物は墳丘の南側に置かれていたと伝わるが、何時しかその所在は不明になった。

1941年（昭和16）、末永雅雄が奈良県内の主要古墳を概観する中で中尾山古墳を紹介するが、岩周巢氏による挿図に注目できる¹⁹⁾（図11）。この挿図では石槨の盗掘孔が確認でき、閉塞石や東側壁付近に草木が描かれていることから、島本一による発掘調査以降の状況を描写したものであろう。石槨内部の床面は描かれているが、盗掘孔の下位に流入する土砂が描写されており、この時点で設置された排水用の集水桝は土砂に埋まっていたらしい。1944年（昭和19）、佐藤小吉は皇紀2600年記念事業として刊行された地誌である『飛鳥誌』で中尾山古墳にふれるが、『奈良県に於ける指定史蹟』から多くを引用・転載する²⁰⁾。文末では『大和志』の檜隈阿古岡上陵に言及し、中尾山古墳の近辺にある小字「悪谷」を安古谷の転嫁とし、安古岡の地と推定している。

3. 戦後から現在に至る調査研究と中尾山古墳

第二次世界大戦後、中尾山古墳は注目されることなく約30年の時が流れたが、1972年（昭和47）に高松塚古墳の発掘と極彩色壁画が発見されたことにより、終末期古墳に関心が注がれるようになった。

1973年（昭和48）、藤井利章が1970年に実施した中尾山古墳の墳丘測量調査の成果と墳丘・石槨の詳細な観察成果をもとに、氏がいう晩期古墳時代を3期区分する中で、本墳の占める位置や意義を論述した²¹⁾。なお、野淵龍潜の絵図や上田三平の測量図では墳丘の西側部分が天井石より高く表現されているが、この測量図では平坦である。これは先に島本一が施工した排水管設置工事のときに削平された可能性が高い。

1974年度（昭和49）、網干善教らによって環境整備にともなう発掘調査が実施された²²⁾。1927年（昭和2）年に史跡指定されたものの私有地のままであった墳丘部分は、飛鳥保存の閣議決定により1970年（昭和45）に公有地化された。その後、1972年に高松塚古墳が発掘されたことを契機にして、見学者が急増したことから墳丘の荒廃が一段と進んだ。このため、墳丘

18) 島本一 1936「中尾山古墳に就いて―封鎖に関する観察―」『考古学雑誌』26巻10号

19) 末永雅雄 1941「中尾山古墳」『大和の古墳墓』近畿観光会

20) 佐藤小吉編 1944「中尾山古墳」『飛鳥誌』奈良県高市郡教員会

21) 藤井利章 1973「晩期古墳の基礎的考察―特に大和中尾山古墳を中心にして―」『龍谷史壇』66・65号 龍谷大学史学会

22) 中尾山古墳環境整備委員会編 1975『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』奈良県明日香村

の周囲に保護柵を設けるとともに、埋没した集水榦の機能を回復させる目的の環境整備事業の事前発掘調査であった。この調査では墳丘と外周部分が発掘された結果、中尾山古墳が八角形の外形を呈する古墳であることが確定するとともに、新たな墳丘測量図・断面図などと石槨の詳細な実測図が作成された（図 12・13）（写真 2）。また、墳丘の東側裾部にある盗掘時の排土中から沓形石造物が 1 個出土し、合計 2 個を数えることになった（写真 3）。発掘調査後には石槨を保護するため盗掘により欠失していた東南隅角石を新たに補填し、その天井付近まで埋め戻された。また、園路や解説板の設置工事が行われ墳丘の保護が図られた。

2010 年（平成 22）、西光慎治と辰巳俊輔が 1974 年度の発掘調査から約 35 年の時を経て、広範囲の国土座標を基準とした詳細な墳丘測量図を作成した²³⁾。これにより中尾山古墳の立地や墳丘形態の詳細が明らかになり、中尾山古墳の研究を前進させることになった。

2020 年度（令和 2）、奈良県・橿原市・桜井市・明日香村が世界遺産登録を目指す「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の構成資産である中尾山古墳の墳丘規模や詳細な構造解明を目的とした範囲確認調査を、明日香村教育委員会と関西大学文学部考古学研究室が共同して実施した²⁴⁾。2020 年 11 月 28・29 日には、COVID-19 の第 3 波蔓延と悪天候の中で開催された現地見学会には合計 2800 人の見学者が訪れ、人びとの関心の高さが示された。先述のように正式報告書は 2021 年度末刊行の予定で作成中であるため、墳丘や石槨等の細部構造や数値などの詳細はそれに譲り、ここでは要点に絞って成果を述べておこう。

まず、墳丘構造についてみると、版築で築かれた 3 段の墳丘部とその周囲をめぐる 3 重の外周石敷をもつ八角墳であることが確定した（写真 4）。墳丘の 1 段目と 2 段目の裾部には花崗岩の基底石を並べ、その上部に基壇状の石積を構築する。3 段目は版築のみの盛土で八角形に成形されている。墳丘裾部から広がる外周石敷は 1 周目と 2 周目の外縁部に大形石材を八角形に並べ、その内部に石材を敷き詰めている。埋葬施設をみると、底石 1 石、側壁 2 石、奥壁 1 石、閉塞石 1 石、天井石 1 石、隅角柱石 4 石の合計 10 石で構成された横口式石槨である。特に、石槨内面の天井石や側壁は極めて丁寧に研磨され、水銀朱が塗布されていた。石材の材質は底石が石英閃緑岩（飛鳥石）、天井石が細粒黒雲母花崗岩で、その他は流紋岩質溶結凝灰岩（竜山石）が使用される。このうち、竜山石は閉塞石のみが赤白色系の色調で、その他は黄白色系を呈しているが、石槨が産出地や色調が異なる石材で構成されている点に注目できる。

また、石槨の東南部には隅角柱石を抜取ったあと、東側壁と閉塞石の内隅角部を打欠き、閉塞石を南方に押上げた最大幅約 26cm の盗掘孔がある（写真 5）。従来、この石槨の内部構造や内法から火葬による蔵骨器が埋置され、その候補として明日香村古宮遺跡で出土した金銅四鍔壺（胴径約 42cm）を推定する意見がある。今回の発掘調査で再確認された盗掘孔の規模から、一見この見解は首肯しがたい状況である。しかし、閉塞石の下部構造と底石上面の平滑な状態

23) 西光慎治・辰巳俊輔 2010 「王陵の地域史研究～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅳ」『明日香村文化財調査研究紀要』第 9 号 明日香村教育委員会

24) 明日香村教育委員会・関西大学考古学研究室 2020 『中尾山古墳』



図 12 中尾山古墳墳丘実測図（1974 年度）

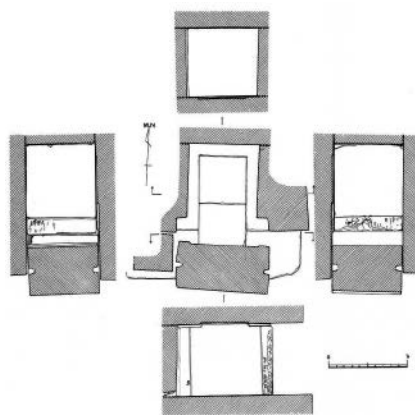


図 13 中尾山古墳石槨実測図（1974 年度）



写真 2 中尾山古墳墳丘全景（1974 年度）



写真 3 中尾山古墳沓形石造物（1974 年度）



写真 4 中尾山古墳墳丘全景（東から・2020 年度）



写真 5 中尾山古墳石槨と盗掘孔（東南から・2020 年度）

などを勘案した場合、蔵骨器を取出したのちに閉塞石を押戻した可能性も考慮する必要があるだろう。

最後に、1974年度の発掘調査で出土した杵形石造物を再確認した。この杵形石造物は、1934年の石槨南面前方からの出土時にも、その特徴的な形状により注目されたが、今回の発掘で当初の形状を保持した完形品であることが判明し、部位により加工方法や範囲が異なることなどに関する詳細な資料が得られたことも重要である。本例は中世の盗掘時に墳頂部から転落し、その上部に小山状の排土が置かれたため、採石工事による搬出からの逃れたのであろう。今後、墳丘外形との関連において、この杵形石造品の本来の個数や配置個所、全体の形状などについて吟味・検討を進め、中尾山古墳が築造された時代の特徴や意義についての議論を深める必要がある。

以上のように、中尾山古墳は特異な形態・構造を呈する八角墳であるとともに、横口式石槨に蔵骨器を埋置した埋葬施設であることから、古墳文化の最終段階の様相を明らかにすることができる事例として重要である。

【参考文献】

- 伊藤純 2003 「元禄の山陵図—大阪府立中之島図書館蔵「大和地方三十帝御陵絵図」—」
『日本考古学』15 日本考古学協会
- 史蹟名勝天然記念物保存協会 1927 『奈良県に於ける指定史蹟 第1冊』史蹟調査報告 第3
刀江書院
- 末永雅雄 1980 「中尾山古墳」『大和の古墳（増補版）』近畿文化会
- 高野和人編 1999 『天皇陵絵図史料集成』青鞞社
- 奈良文化財研究所・宮内庁三の丸尚蔵館 2012 『金銅四鍔壺の調査研究』奈良文化財機構
飛鳥資料館

謝辞 本稿を作成するにあたり、西光慎治氏、辰巳俊輔氏、山下大輔氏、佐藤健太郎氏、田中詢弥氏、中村真里絵氏にご教示・助力賜った。ご芳名を記して、深謝いたします。